

平安朝和歌の真相

田中喜美春

①

籠もよ み籠持ち ふくしもよ みふくし持ち この岡に 菜摘ます兒 家告らな 名告ら
さね そらみつ 大和の国は おしなべて 我こそ居れ しきなべて 我こそいませ 我こ
そば 告らめ 家をも名をも (万葉集 一・一、雄略天皇)

春山の咲きのををりに春菜摘む妹が白紐見らくしよしも (同、八・一四二二、尾張連欠名)

明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ (同、八四二七、山部赤人)

難波辺に人の行ければ後れ居て春菜摘む兒を見るが悲しと (同、八・一四四二、丹比屋主)

……春花の 咲ける盛りに 思ふどち 手折りかざさず 春の野の 繁み飛びくく 鶯の
声だに聞かず をとめらが 春菜摘ますと 紅の 赤裳の 裾の 春雨に にほひひづちて
通ふらむ 時の盛りを いたづらに 過ぐしやりつれ……

(同、十七・三九六九、大伴家持、天平十九年(七四七)三月三日)

②

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

(古今集、春下・一二三、小野小町)

春立ちてわが身ふりぬるながめには人の心の花も散りけり

(後撰集、春上・二二、よみ人しらす)

③

仁和のみかど、親王におましましける時に、人に若菜たまひける御歌
君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ

(古今集、春上・二二)

④

(題しらす)

よみ人しらす)

春日野のとぶひの野守出でて見よまいくかありて若菜摘みてむ (古今集、春上・一八)

あづさ弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さく降らば若菜摘みてむ (同、二〇)

⑤

男のもとより「いまは異人あんなれば」と言へりければ、女に代わりて よみ人しらす
思はむとたのめしことあるものをなき名を立ててただに忘れぬ (後撰集、恋二・六六二)

返し

春日野のとぶひの野守見しものをなきなといはばつみもこそうれ (同、六六三)

作者：前歌、藤原実頼 後歌、清原元輔(九〇八〜九九〇) 後歌、「無き名」「無き菜」
を掛ける。

⑥ 春日野の今日七草のこれならで君をとふひはいつぞともなし (赤染衛門集 四七七)
 「烽」とふひ」の「ひ」は乙類、「訪ふ日」の「日」は甲類。
 万葉集の春日野は、野遊の地ではあるが、春菜とともに歌われることはない。若菜が密接に
 むすばれるのは、古今集以後である。
 春日の烽は、和銅五年(七一三)に設置され、延暦一八年(七九九)に廃止された。

⑦ 歌たてまつれとおほせられし時、よみてたてまつれる 貫之
 わが背子が衣はるさめふることに野辺のみどりぞ色まどりける (古今集 春上・一三五)

⑧ 紅のしぐれなればやいそのかみふるたびごとに野辺の染むらむ (貫之集 三・三二六)

⑨ 歌たてまつれとおほせられし時、よみてたてまつれる 貫之
 春日野の若菜摘みにやしろたくの袖ふりはくて人の行くらむ (古今集 春上・一三二)

⑩ 屏風の絵なる花をよめる 貫之
 咲き初めし時よりのちはうちはくて世は春なれや色のつねなる (同、雑上・九三二)
 松風の吹かむかぎりはうちはくて絶ゆべくもあらず咲ける藤波
 (貫之集 二・一九二、宇多法皇六十賀屏風歌)

⑪ ……はるひ 春日を過ぎ 妻ももる を佐保を過ぎ…… (紀歌謠 九四)
 かすみたつ春日の里の梅の花花に問はむとわが思はなくに
 (万葉集 八・一四三七、大伴駿河麻呂)

⑫ 春日野の若菜も君を祈らなむたがために摘む春ならなくに (貫之集 二・一七三、大納言藤原清貫六十賀屏風歌)
 ちはやぶる神立ちませよ君がため摘む春日野の若菜なりけり
 (同、三・三二八、清和天皇女御藤原佳珠子八十賀屏風歌)
 年の内に春立つことを春日野の若菜さへにも知りけるかな
 (同、六・七〇二、尚侍藤原満子四十賀歌)

⑬ 日本紀略、延喜一七年(九一七)二月二六日には「於御前賀中納言藤原定方卿四十算」とあり、公卿補任、西宮記にも同様の記事がある。延喜二二年の誤りか。貫之集に、「延喜二二年、

定方左衛門督の賀の時の歌「六・六九六」がある。ただし、この年、定方は、右中将。定国、定方、満子は、醍醐天皇の母、胤子と同腹のきょうだい。父は、贈太政大臣高藤、母は、官道弥益女。定方は、時平が死去して五日後、延喜九年四月九日参議となる。

⑭ 源氏物語・若菜上

するのである。(五)玉露と黒黒との間に生まれた子。上の子は二年前の十一月に生まれた。上木住三歳。したがってこの時、教生三歳であり、あいつで生まれた下の子は二歳のはず。後文の「振分髪」は「直衣髪」とも関連して、年紀上疑問がある。六玉露は源氏に心を寄せながらも、結局、黒黒の子を養育して生んだので取すか。七黒黒にとつて、最初自分との結婚を悔いていた玉露に、子供を二人も生ませたことが決定的勝利なのである。源氏にも八歳ごろまでは、頭髪を両方に振り分け垂れ、肩のあたりで切りそろえた。八直衣の髪なり「原江入楚」。二孫たち。玉露は源氏の養女なので、このように言う。二自分の老齢が。三分露。黒黒屋との結婚は昨年四月、十で子が産むのは、やや不自然。三玉露が、まづ先に四十の若菜を連上したことに感謝しつつも、そのことが、老齢を感懐させてくれたと恨む。若い玉露に対する社交辞令のうち、彼女への恋を断念するはかなくなたことへの恨みを含めた。四「おもしろくかけり(原江入楚)。五玉露十六歳。六若菜さす野へは、「小松」をいうため。七「引」は、「小松」の隠語。正月の子の日に、小松を引き成嫁する風習があったので、その「小松」に子供の意をかよわせ、「もとの若根」に源氏をたとえる。前の源氏の言葉に「若菜」をたどる。八源氏に取しつとして。九源氏に恋情を起ささないため、わざと大人ぶった。一〇「折敷」玉露四〇〇〇注三・四巻四五一九。四つは、四十歳に達がある。二若菜の隠語。辛物などの料理を中絶に盛り、折敷に載せて出す。三小松原は孫、「若菜」は自分(源氏)。小松原の「原」は、調子をとのえるために添えた語とも、複数の気持を表わすともいう。「引く」は、「小松」の隠語。「む」は、「摘む」と「むじ」をかける。三紫の上の父。

なる隔てもなくて、御物語聞こえかはしたまふ。幼き君もいとらつくしくてもものしたまふ。尚侍の君は、うちつづきても御覧せられじとのたまひけるを、大将の、かかるついでにだに御覧せさせんとて、一人同じやうに、振分髪（かみ）の何心なき直衣（なほ）姿（すがた）ともにておはす。源氏過ぐる齢（とし）も、みづからの心にはこゝとに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々（すゝめ）のもよほしになん、なまはしたなきまで思ひ知るるをりもはべりける。中納言のいつしかと儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔して、まだ見せずかし。人よりことに教へとりたまひける今日の子の日に、なほうれたけれ。しばしは老を忘れてもはべるべきを」と聞こえたまふ。尚侍の君も、いとよくなびまさり、ものものしき（しんせき）気さへ添ひて、見るかひあるさましたまへり。
玉露 若菜さす野への小松をひきつれてもとの岩根をいのるけふかな
と、せめておとなび聞こえたまふ。沈の折敷四つして、御若菜さばかりまゐれり。御土器とりたまひて、源氏小松原のよはひに引かれてや野への若菜も年をつむべき
など聞こえかはしたまひて、上達部あまた南の障（かど）に着きたまふ。

お言葉をお交しになる。幼いお子もまったくかわいらしくいらっしやる。尚侍の君は、お子がたてつづけに生まれたのをこらんに入れたくないとおっしゃったのであったけれども、大将が、せめてこのような折にでもお目にかけて言うので、お連れになり、お二人とも同じように振分髪で、無邪気な直衣姿でいらっしやる。「年をとっていくことも、自分自身の気持としてはとくに気になるわけでもないし、ただ昔ながらの子供しみた有縁で暮らして、何を改めるでもないのですが、こうして孫たちができると、それにせきたてられるように自分の老齢が何やらさまりわるいほどに痛感されるときもあるのです。中納言がはやばやと子供をつくったそうですが、大げさに分け隔てをして、まだ見せてくれないのですよ。あなたが誰よりも先にわたしの年を教えてお祝いしてくださった今日の子の日は、かえってやはりうらめしい気持です。しばらくの間は老いを忘れてもいられたでしょうに」と申しあげられる。尚侍の君も、まことに楽しく女さかりとなり、重々しい有縁までそなわってきて、見るかひのある有縁でいらっしやる。

若菜さす……若菜が芽ぐむ野辺の小松一人の子をひき連れて、あなた様のいつまでも愛わらぬご繁栄をお祈りにおかつた今日なのでございます。
と、無理に大人ぶってこう申しあげられる。沈の折敷を四つ並べて、御若菜をかたさばかりに召しあがる。御盃をお取りになられて、
小松原……小松原孫たちの行く末長い齢にあやかって、野辺の若菜―わたしもきつと長生きすることでしょう。
などと、歌みかわしていらっしやるうちに、上達部が大勢南の障にござ席（ござ）になられる。

⑮ 弘仁四年(八三三)四月二日、後の淳和天皇の南池に嵯峨天皇が行幸したおりの贈答歌(類聚国史、三二)

今日の日の池のほとりにほととぎす平は千代と囀くは聞きつや (右大臣藤原園人)
ほととぎす鳴く声聞けば歌主とともに千代にと我も聞きたり (嵯峨天皇)

⑩

今上、梅壺におはしましし時、薪木樵らせたてまつりたまひける

(太政大臣 藤原忠平)

山人の樵れる薪木は君がため多くの年をつまむとぞ思ふ

(後撰集 賀・一三八〇)

御返し

御製 (村上天皇)

年の数つまむとすなる重荷にはいと小付を樵りもそくなむ

(同、一三八一)

⑪

嵯峨院の太后宮の六十賀 正月二七日乙子の日 (うつほ物語・菊の宴)

御挿頭、尚侍の殿、松の下に鶴据ゑて、

おのれだによはひ久しきあしたづのねの日の松の陰に隠るる

御 (太后宮)

われ一人鶴と松とを見るよりも一つ一つは君にとぞ思ふ

⑫

生まれも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しと

(壬佐日記 二月二六日)

⑬

承平五年(九三五)二月、左衛門のかうのとの(藤原美麿)の男女君たち元服し、装着たまふ夜よめる

大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代のかげ見む

(貫之集 六・七二七)

人(藤原美方)の幼き腹ばらの子ども、装着せ、冠せさせ、袴着せなどし侍りけるに、かはらけとりて

源 重之

色いろにあまた千年の見ゆるかな小松が原に鶴やむれるる

(後拾遺集 賀・四四七)

⑭

宮内卿、歳七十なる、「あはれ、昔を思ひ出で侍れば、あの岩のもとの松の木は、かの山に侍りしを、子の日におはしまして、引き植ゑ侍りしぞかし」と奏したまふ。七、八樹ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼賢、

引き植ゑし子の日の松も老いにけり千代の末にもあひ見つるかな

この歌を嵯峨院、いみじうあはれがりたまひて、

(うつほ物語・楼の上 上)

21

たが世にか種はまきしと人間ははいかが岩根の松はこたへむ

(栢木)

本歌 梓弓いそべの小松たが世にか万代かねて種をまきけむ

(古今集 雑上・九〇七、よみ人しらす)

22

命あらばそれとも見まし人知れぬ岩根にとめし松の生ひすゑ

(権姫)